

今、アタリマエの再構築を

滝澤大徳（山岳ガイド・知床山考舎 代表）

あなたは山に登る時、水はどのようにして持っていこうか？水筒に水を詰めていこうか？それともコンビニエンスストアでミネラルウォーターをペットボトルで買ってザックに入れていこうか？そんな遠くない以前は前者が普通であり、水を買うということ自体に抵抗を感じていたと思うのだが、今となっては水の補給は水場ではなく、コンビニが担っているのではないだろうか。先ごろお茶を淹れるという行為自体を知らない者が増えていて、お茶といえばペットボトル入りのものがアタリマエになっているというニュースを聞いて思ったのがこのことである。

コンビニであらゆるものが揃うように、登山界においても装備の軽量化やコンパクト化、ファッション性や機能の向上、インターネット上の大量の情報などなどは直接的間接的に登山の負担を軽く手軽に楽しめるものになっている。と、同時に以前からのルールやマナーが表面的にしか捉えられず、それまでアタリマエと考えあえて書かれていなかったことを明文化しなければならない状況も生まれている。

知床では国立公園として、世界自然遺産地域としてどのように利用するかを利用の心得＝マナーとして設定しているが、ほとんどの内容はアタリマエのことしか述べられていない。にも関わらず、様々な問題事例が発生している。

◎ ザックロッカーじゃないぞ

知床連山縦走路は日本で唯一、野生動物からキャンプ中の食料を守るための食料保管庫＝フードロッカーがすべての野営指定地（羅臼平、三ツ峰、二ツ池、第一火口）に設置されている登山道である。ステンレス製の保管庫は、複数のパーティーが利用できるような容量が確保されており、使用にあたっては食料や食器はにおいの出ないように密閉してから収納してもらう。テントは眠るだけに使い、調理や食事はテント内はもちろんテント周辺から離れた場所で行い、テントと食事場所と食料保管庫の三点の距離をあけることで、ヒグマにテントと食料を関連付けるような学習をさせないことで事故を回避することを目的に設置されている。

このことは登山口や現地での標示はもちろん、リーフレットやインターネットの情報があつたのだが、フードロッカーについてまったく無理解の者も見られる。まだ縦走路でのヒグマとの遭遇事例も少なかった十数年前にフードロッカーは設置されたが、そのときに危



惧されたのは、ゴミ箱にされてしまい逆にヒグマを誘引することであった。幸いにもゴミは僅かに見られるだけで、決定的な問題に至るものはこれではない。もっとも多い問題は羅臼平のフードロッカーに日帰り登山者がザックをデポジットしていくことである。

羅臼岳日帰りにしても知

床連山縦走にしてももっとも利用されている岩尾別コースは、登山口から山頂まで約5時間。羅臼平はその途中、主稜線まで登り、山頂まで残り1時間、縦走路との分岐があり、と、一段落の場所であり、ここで山頂に登るか諦めるかを判断することが多い場所でもある。そのため以前からテントサイトでもある広場にザックをデポジットしていく行為が多く見られたし、縦走登山者が山頂アタックする場合はデポは当然といえる。そのザックをフードロッカーの中に入れていくように変わらしたのはヒグマと登山者の遭遇事例が増えた時期と同調しており、ほぼ毎日のように遭遇事例が発生した昨年2012年はフードロッカーへのデポも多く見られた。

日帰り登山者のザックによってスペースを占有されてしまい、本来利用するはずのテント泊利用者が利用できない状況に何度も出くわしたし、自分自身も使用できない場合があった。大抵の場合、山頂に向かう過程でデポした本人らとすれ違うことが多いため、その際に注意などするわけだが、相手に全く悪気はない。むしろ、彼らとしては良い考えだと思っていた節が多々感じられた。つまり、こういうことだ。

ヒグマ怖い→その辺にザックデポするとヤラレル→フードロッカーならヤラレナイ
自分の行為でその後に生じる問題について配慮されていないのだ。次のように憤った方がいたので念のため注意しておくが、入れ方が悪いので他の登山者がフードロッカーにザックデポすることができなくなる、ではない。

【本来の食料保管の目的で利用できずに困る人がいますよ】

ということである。羅臼平まで来た縦走登山者が頂上アタックに行こうと食料をフードロッカーに預けようとする、すでに複数の日帰りザックを押しこまれていて食料を入れる

スペースを作ることができずに、ザックをデポした登山者が下山してくるのを予定を変更してテントサイトで待っているわけである。

また、デポした自分自身にふりかかることもある。

【デポしてしまってザックがない状態で遭難することもありますよ】

羅臼平から雪田もあり山頂は岩場である。風も強くガスに包まれやすい。滑落や転倒、体調や天候の変化、予定の変更に対応できるのだろうか。必要最小限の装備であるはずの日帰り登山のザックをデポジットしていくということは自ら安全な登山を放棄したといえないだろうか？

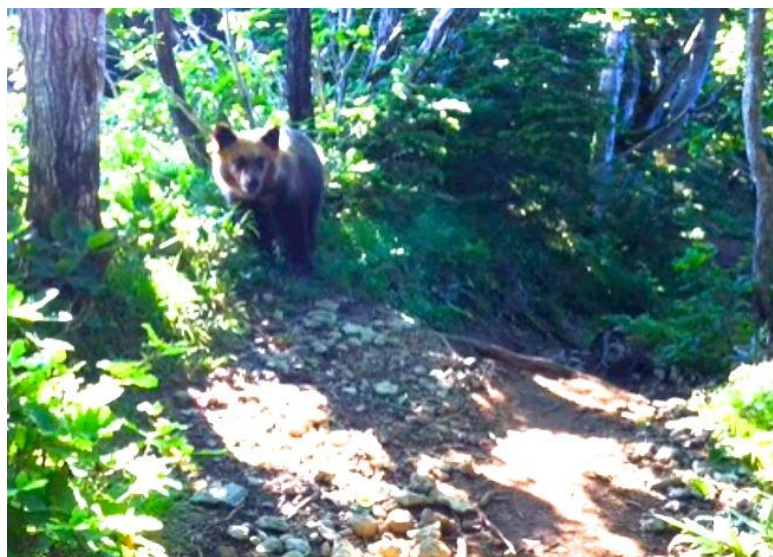
◎ 人は行き去る、ヒグマは学ぶ

ヒグマにヤラレたくなくてザックをフードロッカーにデポする者は迷惑であるがまだ慎重な方だ。しかし、そのようなヒグマを怖がる人たちであってもデポした時点で楽観的すぎる。私が知る羅臼岳で最も高い場所のヒグマの痕跡は標高1660mの山頂の20m下、残雪に残された足跡である。山頂までヒグマに遭遇する可能性があるにも関わらず、多くの登山者は高山帯にヒグマはいないと思い込んでいる。ここまで登ればいけませんよね、と聞いてくる方もいるので、もはや、いないと思いたいという願望といえるだろう。そのような状態でヒグマに出会って足止めやルート変更をすることになったときに、必要な装備がデポされてしまっていたらどうするだろう。ましてやデポしたフードロッカー周辺でヒグマに定着されたら回収もできないことになる。

それではヒグマにあったらどうするか？鈴などでこちらの存在をアピールしておく予防措置。出会ったら慌てず、騒がず、その場を立ち去る。威嚇を受けても走って逃げることなく、用意しておいた撃

退用スプレーを使用する。というのが基本となるが、残念なことに多くの方が予防措置の段階で勘違いをされている。

多くの登山者が鈴を鳴らせばヒグマは逃げる、または寄ってこない、と考えているようだ。実際には鈴を鳴らしているす



ぐ傍にヒグマはいる。極楽平では長い列になったパーティーの数メートル脇でアリを食べていることもあれば、大沢の道端で子グマが地面をほじくるのを親グマがながめていたり、560m岩峰で間隔の開いたパーティーの間をすばやく通り過ぎたり、と、これらはすべて、多くの登山者が鈴を鳴らしている状態での話である。そのため、鈴を鳴らしていたのに出会ってしまった、とか、ヒグマに向かって鈴を振り鳴らしながら突破してきたという話を聞くことになる。

鈴を鳴らすのは自分の存在をアピールすることで人間が接近していることをヒグマに知らせしているだけであり、どうするかはヒグマ次第なのである。言い換えれば、登山者は車内販売の売り子であり、ヒグマが客なのである。売り子は商品をアピールしながら客席を移動しながら動きを察知し見逃したり聞き逃すことなくリクエストに答えなければならない。ヒグマ相手に鈴を鳴らしてアピールする商品は自らの存在だが、ほんとうに必要なのは鈴を鳴らすことではなく動きを察知してリクエスト＝何をしているのか、何をしたいのか知ることだ。しかし、実際にはまるでロールプレイングゲームのように、ヒグマが現れた、勇者は熊避けの鈴を鳴らした、勇者はヒグマを撃退した、というような、鈴を鳴らすなどのアピールを一方的な警告＝クラクションとして使って追い払おうとする行動が多々見られる。

2012年はマスの回帰時期がずれたことが原因と考えられるヒグマの食糧危機が発生したことは痩せた個体の写真とともに広く紹介された。羅臼平でも特定のヒグマがコケモモやガンコウランなどの果実を食べるために定着し、長期間にわたって登山者と近接遭遇していた。果実を貪るヒグマは登山道のすぐ脇のハイマツに囲まれた低矮小木群落を巡りながら、それこそ登山者と並行して進む場合もあった。一見すると登山者を気にせず食事集中しているように見えるが、実際には絶妙なタイミングで進路や距離を変えている。とはいえ、ヒグマならひとまたぎしてくる距離の脇を通りぬけるのはリスクである。立ち去るまで足止めになる例が多く見られたが、中にはクラクションとして鈴や声、爆竹を使って突破していく登山者もいるわけである。

登山道脇5mで果実を食べているヒグマの脇を通過したことがあったが、最初に出会った下山者にそのことを伝え、ヒグマ自体も視認してもらったのだが、私と別れるとその下山者は激しく鈴を鳴らしながら接近していった。通過後にハイマツの向こうにいた事を確認できた私と違い、ヒグマがそこにいることがあらかじめわかっているだけ準備ができているとは言えるが、さらなる問題は接近しているヒグマの向こうに、登ってきている別の登山者がいることであった。すでに高い位置まで登っていた私からはすべて見ることができたが、地形とハイマツで下山者からはヒグマは見えていても登山者は見えず、登山者か

らは下山者もヒグマも見ることができない。二人が至近距離でヒグマを挟みこむ直前、ヒグマは登山道から離れていったが、そこで登山者はようやく気がついたのだろう、体がビクッと硬直したのが遠目でもわかった。その横をもはや鈴を鳴らすのをやめた下山者が通り過ぎた。登山者がヒグマと下山者を何度も交互に見ていたのが印象的だった。

【追い払った先に他の登山者がいるかもしれませんよ】

少なくとも2012年に羅臼平に定着していた個体は登山者との間合いを学んだのだろう。学ばないのは人間のほうだ。ヒグマは知床で暮らしているが、大抵の羅臼岳登山者は一生に一度登りに来るだけだからなおさらだ。事故が起きるとすれば登山者側の対応に問題があるか、登山者の問題のある行為でヒグマに誤った学習をさせてしまったときなのだ。

◎ それはアタリマエのことですか

知床にヒグマがいるのはアタリマエで、その対処法を身につけることもアタリマエであるべきなのだが、未だ正しく広く浸透できていない。そこには、何故そうなるのだろうか、自分はどうすればよいのか、自分の行動がどのような影響をあたえるのか、という想像力の欠如があると考えられる。

知床でのヒグマの事例は特別すぎるといわれるかもしれないのでトイレの問題を見てみよう。

- ・携帯トイレブースの便座に直接排尿や排便されている。
- ・ブースの陰で立ちションされている。
- ・登山には向かないタイプの使用済みの携帯トイレの便袋が捨ててある（たぶん、山中ではじめて封を開けて使ったところ、漏れそうだからという理由で）
- ・携帯トイレの高分子吸収材の粉末をこぼしたものが水分を吸ってブース床面全体がゼリー状になっている。
- ・ブースのメッシュポケットに（たぶん、次に使う人を思って）入れたトイレトーパーが雨にぬれてグズグズになっている。
- ・（ヤブに入るとヒグマに会いそうなので）登山道や休憩場所の広場の真ん中に排泄した痕跡が水たまりとなっていて、それが乾いてもしばらくは臭い。

2012年は新しいパターンが見られた。

- ・携帯トイレブースにザックがデポジットされている。

後から来た登山者はどうすればよいのか。誰が汚物を回収したり清掃するのか。その立場に自分を置いてみればとんでもない作業を強いられることが容易に想像できるはずだ。

フードロッカーの例もヒグマを挟み込みそうになった例もトイレの諸問題も、その先に他の人がいて迷惑がかかるかもしれないというところまで考えを巡らせる事ができていないか、自分さえよければ他人などどうでもよいとしか思えない行動に見える。そのようなときの自己弁護や擁護する声は、その時はそんな余裕がなかった、とか、そこまで考えていたら何もできない、というものだ。しかし、人に迷惑をかけない、というのは人間が社会生活を送る上で基本的な

ことであり、マナーとは社会の秩序と他人との交際を全うするために必要な作法である。人に迷惑がかかればそれはマナー違反なのであり、アタリマエのことができていないということだ。

最後にもう一つ、あらゆる山に共通する問題はどうか。

登山道ですれ違うときあ

なたは傾斜の山側と谷側のどちらに立つだろうか？山岳会系やガイド付き登山ではさすがに見ないが、個人や非組織グループのパーティーの場合、すれ違う8割は谷側に立って不安定な状態で道を譲ろうとする。自分は下座に、という発想なのだろうか。しかし道を譲られたこちらの方も不安定な体勢で通り抜けなければならないことが多く、バランスを崩せば譲った相手もろとも落ちる危険がある。おまけに谷側は道の構造の弱いところだから崩れやすい。従来の山の常識なら、山側に立ち止まり体を安定させ、背負っているザックも山側に向けることでスムーズにすれ違うことができることになっていたのだが、多くの登山者が谷側によける現状では、谷側に立つことがアタリマエになってしまわないだろうか？

ファッションブルで気軽に飛び込めるようになった山の世界では人と人との付き合い方は濃密な上下関係ではなく希薄な並列がアタリマエである。山の知識や技術を伝える場でもあった山岳会などに入らず、多数の書籍やインターネットから情報から得ることがアタリマエになっている。あらゆる装備もネットで購入できるのがアタリマエだから、まった



く山に登ったことがない者が他人との接触を持たないまま完全装備で山頂に立っているかもしれない。登山への認識も経験も不足しているが、自分にとって都合の良い情報のみで構成された知識と、使いこなす技術がなくても入手可能な過剰な装備の登山者。最近の様々な問題や遭難にこのような便利な世の中になったことと関連する傾向は見られないだろうか。

人間は現状に慣らされてしまうと問題を問題として認識しなくなるという。従前からのアタリマエも実際にはいつのまにかアタリマエになっているかもしれない。遭難防止、環境保全、野生動植物保護など登山を取り巻く問題は多種多様にわたるが、自分の行動が周囲に、自然にも他人にも、影響を与えるのだ、という常識的判断がなされるようにアタリマエになっていることをあらためて検証、再構築していく工夫が必要だろう。

2013年、知床・羅臼岳では携帯トイレブースが設置される予定だ。また、ヒグマに関係する登山者の問題解決に向けて検討作業をすすめることとなっている。しっかりとしたアタリマエにしたいものだ。

資料

- ・環境省釧路自然環境事務所、平成21年、知床国立公園 知床半島中央部地区利用の心得
※知床データセンター (<http://dc.shiretoko-whc.com/>) で閲覧可能